

〔論 文〕

# 統語構造における「話しことば性」の数値化

——K. マルクスの『新ライン新聞』を一例として——

細 川 裕 史

## I 書きことばの「話しことば化」

物価の上昇を客観的に指摘するためには、卵なり牛乳なりの値段を通時的に記録し、それらの値段をたがいに比較する必要がある。言語の変遷に関しても同様に、なんらかの傾向を客観的に主張したいのであれば、特定の言語現象を数値で表し、それらを時代ごとに比較しなければならない。

Koch/Oesterreicher (1985, 2007) の「近い—遠いことば」モデルが提案されて以降、書きことばにおける「話しことば性」が注目されてきた。そして、ドイツ語史に関して、先行研究では19世紀末以降、書きことばが「話しことば化 (Vermündlichung) 」(Polenz 1999: 359) していくという傾向が指摘されている。しかし、この傾向を検証するためには、まずは「話しことば性」を数値化し、通時的な研究をおこなう必要がある。この観点から、Hosokawa (2014) では19世紀なかばに刊行された新聞の言語が、統語構造、語彙、形態のレベルにおいて数値化され(文の長さや語の使用頻度など)、その特徴が考察された。

本論文では、そこで用いた「話しことば性」を数値化する方法のうち、より幅広い時代およびジャンルの言語を研究する際に用いられそうな、統語構造に関するものの一部を紹介する。例えば、語彙に関しては、テキストのジャンルによって使用される語彙に大きな偏りがあるうえ<sup>1)</sup>、それぞれの語がもつ意味自体が時代的に変化するため——したがって、それらが持つ「話しことば性」も変化しうる——とくに通時的な研究には向かない。また、形態に関

しては、正書法の成立と普及が大きく影響してくるため、そのような書きことばの規範が存在しなかった、あるいは知られていなかったような、より古い時代の調査には向かない。調査の一例として扱うのは、カール・マルクス (Karl Marx, 1818-83) が編集長をつとめた『新ライン新聞 (Neue Rheinische Zeitung) 』(1848-49) である。その理由は、なにより Hosokawa (2014) の成果との比較が可能であり、また、言語の変遷を考察する際には、言語構造そのものだけでなく語用論的な側面(書き手や読み手の言語意識など)および社会言語学的な側面(テキストが書かれた環境など)も調査することが望ましいが、同紙ではそれらの情報が比較的容易に手に入るからである<sup>2)</sup>。

## II 統語構造における「話しことば性」

統語構造における「話しことば性」を数値化するための指標として、以下に紹介するとおり、本論文では Eggers (1973) および Ágel/Hennig (2006) を参考にした。なお、本章では掲載ページが示せることから、『新ライン新聞』ではなく、同じくマルクスの手による『共産党宣言 (Manifest der kommunistischen Partei) 』(= MK, 1848) から用例をあげながら、統語構造における「話しことば性」の指標を示していく。

### 1. Eggers (1973) における統語構造の数値化

1960年代の言語を古典派作家のものと比較した Eggers (1973) は、直接的に「話しことば

性」を論じたものではない。しかし、統語構造における「話しことば性」を考察する際の重要な指標でもある文の長さや文タイプについて、豊富なデータを備えている点で有用である。また、Eggers (1961) 以降の彼の研究成果は、その後の多くの研究に影響を与えており、多様な比較対象を後世の研究者に提供するきっかけともなっている (Mittelberg [1967], Pfeil [1977], Krüger [1995], Hosokawa [2014] など)<sup>3)</sup>。

文の長さに関して、Eggers (1973) は 1 文中に含まれる語の数を算出している。とくに興味深いのは、調査対象となったサンプルにおいて使用頻度の高い文の長さがグループ化されており、各サンプルにおける傾向が明確にされていることである。Eggers (1973) は、文の長さを「1 - 8 語」「9 - 28 語」「29 - 48 語」「49 - 68 語」「それ以上」の 5 つのグループに分け、1960 年代の言語においても古典派作家の言語においても「9 - 28 語」の使用頻度が最も高いこと、それよりも長い文のグループにおいてはいずれも 1960 年代の言語よりも古典派作家の言語の方が使用頻度が高いことを指摘している<sup>4)</sup>。

Auer (2002) によれば、口頭発話は録音しないかぎり聞き直すことができず、話されたことばを長くは覚えていられないため、一般的に、1 文が短いことが話しことばの典型例とされている<sup>5)</sup>。このことから、Eggers (1973) におけるグルーピングも、「話しことば性」を示す指標として用いることができる。例えば、以下の例 1 も例 2 も主文 1 つで構成されている文であるが、例 1 は Eggers (1973) を基準とすれば「短い」とみなすことができ、一方で、例 2 は最も使用頻度が高いグループに含まれるがそのなかでは最長の文である。

- 1) Die Manufaktur trat an ihre Stelle.  
(MK: 24, 6 語 マニファクチュアがその後釜に座った)
- 2) Alle Mächte des alten Europa haben sich zu einer heiligen Hetzjagd gegen

dies Gespenst verbündet, der Papst und der Zar, Metternich und Guizot, französische Radikale und deutsche Polizisten. (MK: 22, 28 語 古いヨーロッパのすべての権力、教皇やツァーリ、メッテルヒニ、ギゾー、フランスの急進派、ドイツの官憲がこの妖怪に対する神聖な狩り立て猟のために団結した)

また、Eggers (1973) は、文タイプを以下の 4 つに分類している。

1. 「文相当句 (Setzungen)」と私たちが名付けたのは、文法的に不完全な文として形作られた表現である [...]。
2. 「単一文 (Einfachsätze)」は、主文 1 つから成り、したがって副文や不定詞句を含まない文である。[...]
3. 「対結文 ([Satz-] Reihen)」においては、文法的に完全な主文が 2 つかそれ以上並んでいる [...]。
4. そして、「付結文 (Satzgefüge)」は、主文以外に少なくとも 1 つの副文か不定詞句を含む、すべての文である。(Eggers 1973: 41f.)

文相当句に当たるのが、例 3 と例 4 である。例 3 では、先行する文に付け足される形で定動詞のない文が用いられているが、このような付け足しは「話しことば性」の高い用法だといえる。ただし、このタイプの文には、見出しのように文章語にしか用いられないもの、したがって「話しことば性」の低いものも含まれる (例 4)<sup>6)</sup>。

- 3) [An die Stelle der alten lokalen und nationalen Selbstgenügsamkeit und Abgeschlossenheit tritt ein allseitiger Verkehr, eine allseitige Abhängigkeit der Nationen voneinander.] Und wie

in der materiellen, so auch in der geistigen Produktion. (MK: 27 [地方あるいは国家におけるかつての自給自足や自己完結性は, 国家間の全面的な交易, 全面的な依存関係に代わる。] 物質的生産においてと同様に, 精神的生産においても)

4) I. Bourgeois und Proletarier (MK: 22 第1章ブルジョアとプロレタリア)

単一文に当たるのが, 上述の例1および例2である。単一文は, 文法的に完全な文としては最も単純な構造をしており, したがって「話しことば性」が高い文タイプといえるが, すでに例1および例2で示したように, 同じ文タイプであってもその長さによって「話しことば性」に差がある。例5は, 極端に長い単一文の例である。同格の名詞が列挙されているため41語という「長い」文のグループに属し, 口頭発話では理解できないと思われる文だが, 文のタイプでいえば例1と同じ単一文である。なお, このような列挙は, すでに例2でもみられたように, MKにおいてはしばしばみられる。

5) Die Redensarten vom freien Schacher, wie alle übrigen Freiheitsbravaden unserer Bourgeoisie, haben überhaupt nur einen Sinn gegenüber dem gebundenen Schacher, gegenüber dem geknechteten Bürger des Mittelalters, nicht aber gegenüber der kommunistischen Aufhebung des Schachers, der bürgerlichen Produktionsverhältnisse und der Bourgeoisie selbst. (MK: 38, 41語 自由な商いについての決まり文句は, 我らがブルジョアジーが自由について大言壮語しているその他のすべてと同様に, そもそも, 商いやブルジョア的生産関係, ブルジョアジーそのもののコミュニストによる廃止に対してではなく,

自由ではない商いに対して, 中世の隷属した市民に対してのみ意味を持つ)

対結文と付結文は, 主文と主文, あるいは副文および不定詞句との組み合わせからなる文タイプであるが, この分類はあまりに大まかであり, 「話しことば性」を考察するさいには問題がある。Auer (2002) は, 口頭発話では従属的な文構造が避けられる, とみなされていることを指摘しているが<sup>7)</sup>, Eggers (1973) の大まかな区分では, 副文や不定詞句が使われているか否かにしか注目していないため, 副文が1つしかない例6も, 副文を4つ含み例6よりも明らかに従属的な構造をしている例7も, 等しく付結文として扱われてしまう。

6) Unsere Epoche, die Epoche der Bourgeoisie, zeichnet sich jedoch dadurch aus, daß sie die Klassengegensätze vereinfacht hat. (MK: 23 しかし, 私たちの時代, つまりブルジョアジーの時代は, 階級対立が単純化された点に特徴がある)

7) Die bürgerlichen Produktions- und Verkehrsverhältnisse, die bürgerlichen Eigentumsverhältnisse, die moderne bürgerliche Gesellschaft, die so gewaltige Produktions- und Verkehrsmittel hervorgezaubert hat, gleicht dem Hexenmeister, der die unterirdischen Gewalten nicht mehr zu beherrschen vermag, die er heraufbeschwor. (MK: 28 ブルジョア的生産および交易関係, ブルジョア的所有関係, 強大な生産および交易関係を魔法のように生み出した近代のブルジョア的社会は, 自らが呼び出した黄泉の国の力をもはや制御できなくなった魔術師のようなものである)

## 2. Ágel/Hennig (2006) における「話しことば性」の数値化

文構造が並列的か従属的かは、「話しことば性」の重要な指標であるが、この点ではEggers (1973) における文タイプの分類は不十分であった。そこで、それを補うものとしてÁgel/Hennig (2006) における基準が有用となる。彼らは、文そのものよりも文を構成する基礎文(主文や副文など)に着目し、以下の分類を提案している。

1. 非文(Nicht-Satz)は、NNS(Nähe-Nicht-Sätze, 近い非文)とDNS(Distanz-Nicht-Sätze, 遠い非文)に分けられる。
2. NNSは、破格構文や省略文[…], 文頭や文末に付随する構造(文頭に付随する自由なテーマや文末に付随する付け足しなど), 呼格, Nマーカー(近いディスコース・マーカー)などである。[…]
3. DNSは、Dマーカー(遠いディスコース・マーカー)や見出し、文章の始まりと終わりの決まり文句、日付などである。
4. レベル1の基礎文(E-Satz<sub>1</sub>)は、自立しているか支配的な文である(したがって、すべての単一文や主文)。[…]
6. レベル1以外のすべての基礎文は、従属的な文である。
7. 従属関係の確定方法は、以下のとおり。従属接続詞をもつか定動詞が後置されたすべての基礎文、定動詞第二位だが従属関係にあるシグナル[… ]として接続法が用いられているすべての基礎文、そしてすべての不定詞句(IK)は従属的な基礎文であり、したがってレベルXの基礎文(E-Sätze<sub>x</sub>)である。

(Ágel/Hennig 2006: 64)

この分類をEggers (1973) における文タイプに当てはめた場合、文相当句は「非文のみで構

成された文」あるいは「基礎文を1つも含まない文」、単一文は「自立的基礎文(E-Satz<sub>1</sub>)1つで構成された文」、対結文は「自立的基礎文2つ以上で構成された文」、付結文は「自立的基礎文と従属的基礎文(E-Satz<sub>x</sub>)1つ以上で構成された文」と定義しなおすることができる。このÁgel/Hennig (2006) の提案を取り入れた分類であれば、基礎文の数を算出することから、対結文や付結文に含まれる主文と副文の割合を通じて、文の並列性および従属性をよりの確に考察できる。ただし、Ágel/Hennig (2006) の分類においては、接続法が用いられている主文も従属的基礎文とされるため、Eggers (1973) やそれに倣った先行研究の成果と比較する際には、注意が必要である。

文構造の複雑さに関しては、Ágel/Hennig (2006) はその他にも、「文構造の線条性」(Ágel/Hennig 2006: 68) を算出することを提案している。これは、彼らが「統合的に中断された基礎文(integrativ unterbrochener Elementarsatz)」(= I-UBS) と呼ぶ言語現象の出現頻度を調べるといいうもので、言い換えるなら、テキストにおいてどれほど箱入り文(Schachtelsatz) が使用されているのかを数値化するものである。彼らは、「基礎文の数をI-UBSの数で割った数値が小さいほどより統合的(線条性が低いほど統合的)」(Ágel/Hennig 2006: 65) としている。一般に、線条性が高ければ「話しことば性」も高いとみなされるため、この数値が高いほど「話しことば性」も高いといえる<sup>8)</sup>。同程度の頻度で従属的基礎文が用いられていても、箱入り文が避けられ線条性が高ければより理解されやすいため、この数値を求めることは重要である。以下の例8と例9(=例7)は、どちらも従属的基礎文4つを含んでいるが、例8ではI-UBSがみられないのに対し、例9ではI-UBSが2回みられるため、例9の方が線条性が低くなっている<sup>9)</sup>。

- 8) Sie [die Arbeit des Proletariers] schafft das Kapital, d. h. das Eigentum,



welches die Lohnarbeit ausbeutet, welches sich nur unter der Bedingung vermehren kann, daß es neue Lohnarbeit erzeugt, um sie von neuem auszubeuten. (MK: 37 それ[プロレタリアの労働]は資本を、つまり、新たに搾取されるために生み出されるという条件下においてのみ増えることが可能な賃労働から、搾取する所有をつくる)

- 9) [= 7)] Die bürgerlichen Produktions- und Verkehrsverhältnisse, die bürgerlichen Eigentumsverhältnisse, die moderne bürgerliche Gesellschaft, die so gewaltige Produktions- und Verkehrsmittel hervorgezaubert hat, gleicht dem Hexenmeister, der die unterirdischen Gewalten nicht mehr zu beherrschen vermag, die er heraufbeschwor. (MK: 28, 下線筆者, 以下同様)

### Ⅲ マルクスの言語意識と『新ライン新聞』

本章では、まず、語用論的視点として編集長であるマルクス自身の言語意識を、それから、社会言語学的視点として『新ライン新聞』がおかれた社会背景を考察する。

#### 1. マルクスの言語意識

Marx/Engels (1974) に収められたテキストに基づきながら、マルクスの言語意識について考察していく。生前、身近にいた人々の回想では、マルクスが著名な作家の書いた作品を愛読しており、彼らの言語に通じていたことが繰り返し言及されている。例えば、マルクスの「弟子」を自認していたヴィルヘルム・リープクネヒト (Wilhelm Liebknecht, 1826-1900) は、その回想録のなかで以下のように述べている。

マルクスの文体は、まさしくマルクス自

身だ。彼が最小の空間に可能なかぎり多くの内容を詰め込もうとしたことは、非難されるべきことだろうが、それこそがまさにマルクスなのだ。

マルクスは、正確で適切な表現を並外れて重視していた。そして、ゲーテやレッシング、シェイクスピア、ダンテ、セルバンテスをほぼ毎日読んでおり、彼らのなかから最高の師を選び出した。言語の正確さおよび適切さに関していえば、彼は非常に几帳面だった。(Zit. nach Marx/Engels 1974: 25f.)

また、マルクスの娘婿であるポール・ラファルグ (Paul Lafargue, 1842-1911) も、以下のよう

に回想している。彼[マルクス]はハイネとゲーテのことは暗記しており、会話のなかで両者をよく引用していた。彼はヨーロッパ中から選りぬいた作家の作品をいつも読んでいた。毎年、アイスキュロスをギリシャ語の原文で読んでおり、彼とシェイクスピアを、劇作における人類史上最大の天才として尊敬していた。(Ebd.: 28)

これらの言説からは、マルクスが教養市民らしく高尚な言語を好み、口頭発話において文学作品からの引用を多用していたことがうかがえる。しかし、その一方で、マルクスは決まり文句を多用することを軽蔑しており、自分で考えて自分のことばで語ることを重視していた、ともリープクネヒトは指摘している。

彼[マルクス]は、きれいごとを言う者を毛嫌いしており、延々と決まり文句を使う者に腹を立てていた。この点で、彼は容赦なかった。「決まり文句を並べたてるヤツ (Phraseur)」というのが、彼の口から出る最も厳しい罵り言葉だった——そして、彼に一度でも「決まり文句を並べたてるヤツ」

とみなされれば、もう二度と相手にされなかった。論理的に考え、その考えを明瞭に表現せよ——彼は私たち「弟子」に、ことあるごとにそう説き、研究させた。(Ebd.: 27)

新聞に関していえば、マルクスは、その言語が思慮深いだけでなく、感情的であることも重視している点が「話しことば性」研究の観点からは興味深い。しかし、その一方では、やはり文学作品を愛した彼らしく、文学的な表現にも価値を見出している。以下は、それぞれ1843年1月に彼によって書かれたテキストであり、前者はある通信員について、後者はアウクスブルクの『一般新聞 (*Allgemeine Zeitung*)』について述べている。

報道は、知識として民衆の状況を示すものであるが、同時に、感情としてもそれを示している。したがって、その言語は、その状況を上から見て評価をくだすような思慮深いことばであるだけでなく、同時に、その状況そのものを表す感情的なことばでもある。このような言語は、官報などには求められないし、また求めてもいけない。(Ebd.: 375)

その形式は、同紙がかつて有していた唯一の財産だったが、その文学的な香り (*parfum littéraire*) のする形式すらも失ってしまい、プチブル的で冗漫、かつ尊大で不格好なものにとって代わられた[...]. (Ebd.: 376)

さらに興味深いのは、『新ライン新聞』1849年1月26日号に掲載された記事において、ベルリンの『国民新聞 (*National-Zeitung*)』の記事を引用し、マルクスが以下のように述べていることである。

『国民新聞』が善意から予備選挙の選挙人に送った忠告は、まず彼らに以下のように表明している。

„Es ist die Stunde gekommen, wo zum zweiten Male das preußische Volk darangeht, das schwer errungene allgemeine Wahlrecht auszuüben, aus dem die Männer hervorgehen sollen, die zum zweiten Male auszusprechen haben, welches der Sinn, die Meinung und der Wille nicht einzelner Stände und Klassen, sondern des ganzen Volkes ist.“ [プロイセンの民衆が苦労して獲得した普通選挙権を2度目に行使する時が来たが、その結果としては、それぞれの身分や階級ではなくすべての民衆の感覚、意見、意向であるものを2度目に表明すべき人々が誕生しなければならない]

単語から単語へ喘ぎながらノロノロと這っていくようなこの文にみられる、ブクブクと膨れあがったぎこちない (*fettwanstig-unbehülflich*) 文体については触れないでおこう。(Ebd.: 379)

ここでマルクスが引用している文は、49語、自立的基礎文1つ、従属的基礎文6つを含んでいる。このような複雑な文は、「話しことば性」が低いとみなせる。彼は、このような文を軽蔑していたようである。ただし、たしかにこれは読みにくい文ではあるが、第IV章で紹介するように、彼自身の手による『新ライン新聞』にもこの程度の「ブクブクと膨れあがったぎこちない」文がみられないわけではない<sup>10)</sup>。

## 2. 『新ライン新聞』

『新ライン新聞』(= RZ) は、三月革命期にプロイセン王国ライン州の州都ケルンで発行されていた日刊紙であり、社会主義の立場から革命期の政治状況を報じた最初期の社会主義系政党紙 (*Parteipresse*) である。当時としては注目値する6,000部という部数を誇り、今日では「三月革命期における最善の政治的新聞」(Hosfeld 2018: 66) という評価を受けている<sup>11)</sup>。

RZは、『ライン新聞』の後継紙とみなされて

Mar. 2025

統語構造における「話しことば性」の数値化

いる。マルクスは、1842年に創刊された『ライン新聞』においてジャーナリスト活動を始めた。アカデミズムの世界で職に就けなかった場合にジャーナリストになるというのは、当時の教養人にはしばしばみられるケースであった。急進的な教養層向けであった同紙の創刊が時のプロイセン政府に許可されたのは、当時8,000もの定期購読者を持ち、政治的に大きな影響力をもっていたカトリック系の『ケルン新聞 (Kölnische Zeitung)』の勢力を削ぐという効果が期待されたからでもあった。マルクスは、同年10月に編集長になると、1,000部以下だった『ライン新聞』の売上をクリスマスまでに3,500部にまで伸ばしたが、検閲が強められると、同紙は翌年3月には廃刊に追いやられている<sup>12)</sup>。

三月革命が起きると、マルクスは、急進的な富裕市民層の支援を期待して、ケルンにおいて新たな新聞を企画する。しかし、『ライン新聞』を支持した人々からの支援は受けられず<sup>13)</sup>、期待していたほどの資金は集まらなかった。結局、マルクス自身が身銭を切ることになったRZは、フランクフルト国民議会が初めて開催された半月後の1848年6月1日に、その創刊号が発行された。同紙は、「民主主義の機関紙」を称していたが、民主主義の立場で活動する政治家たちを支援することよりも、彼らの活動を監視し、独自の立場から批評することに主眼を置いていた。また、『ライン新聞』と同様に地元密着路線を敷き、ライン地方における諸問題を中心的に取り上げた——最終号1面にも、労働者階級の解放を呼びかける「ケルンの労働者たちへ」(RZ 19.5.1849)という記事が掲載されている。このことは、しかし、同紙がその読者数の割には全国的な影響力を持てなかった原因とみなされている。そして、民衆を扇動したとしてマルクスが国外追放されることになると、同紙もまた、わずか2年で廃刊させられた<sup>14)</sup>。

編集作業に関していえば、同紙は編集長であるマルクスに独裁的に仕切られ、編集員も共産主義者同盟 (Bund des Kommunisten) のメン

バーで占められていた<sup>15)</sup>。RZの文体については、マルクス自身のコメントが見つからなかったため、代わりにエンゲルスのことばを紹介しておく。1884年2月中旬から3月初めに、彼は同紙の「語調」をふり返って、以下のように述べている。

ところで、この新聞の語調 (Ton) は、まったく厳粛でも真面目でも、熱狂的でもなかった。私たちににとっては軽蔑すべき敵対者ばかりだったし、私たちは彼らを例外なく最大級に軽蔑しながら取り扱った。[...] 私たちは彼らを、ただ嘲り、冷やかしながら取り扱ったのだ。(Zit. nach Marx/Engels 1974: 381)

1849年春に決戦が近づいてくると、この新聞の言語は、号を重ねるごとに激しく、より情熱的になっていった。[...] どの号でも、どの号外でも、大規模な戦いの準備がなされていること、フランスやイタリア、ドイツ、ハンガリーにおける対立が切迫していることが指摘されていた。とくに4月と5月の号外では、同じくらの分量で、戦闘開始の準備をするようにとの民衆への呼びかけが行われた。(Ebd.: 382)

エンゲルスによれば、同紙は当初こそ冷やかな調子だったが、号を重ねるごとに情熱的になっていった。「話しことば性」の観点からみれば、心理的な側面において、「話しことば性」が高まっていったといえる。本論文では、創刊号のみを分析したため、このような変化は明らかにできない。しかし、「冷やかか」な語調だったとされる創刊号の言語もまた、政治的理念を共有している (心理的に「近い」) 読者を想定し、プロレタリアートに共感してもらえる文体を選んでいたと考えられるため、他紙と比較した場合、「話しことば性」が高かった可能性がある。

## Ⅳ 『新ライン新聞』における「話しことば性」

### 1. コーパス

RZのサンプルは、ベルリン＝ブランデンブルク学術アカデミー（BBAW）のサイトにあげられた創刊号（1848年6月1日号）のデジタル・データから、ニュース記事5,503語を抽出した。トップ記事から順に抽出したが、著作権の問題からいくつかの記事が同サイトには含まれていない。比較対象としては、以下の5つのサンプルを調査した。同時代の新聞のサンプルはHosokawa（2014）で分析したものであり、すべてニュース記事をトップ記事から順に抽出している。

- ・MK:前書きから第2章終わりまでの6,398語、RZの同時代におけるマルクス自身のことばの例として。エンゲルスによる注記は含めていない。
- ・『ドイツ改革—立憲ドイツのための政治紙（*Deutsche Reform. Politische Zeitung für das constitutionelle Deutschland*）』（= DR）：1850年1月1日号から3日号までの21,801語、RZと同時期の政治的な新聞の例として。
- ・『教養ある読者のための朝刊（*Morgenblatt für gebildete Leser*）』（= ML）：1851年1月1日号から29日号までの21,765語、RZと同時期の教養市民層のための新聞の例として。
- ・ライプツィヒ版『絵入り新聞（*Illustrierte Zeitung*）』（= IZ）：1851年1月1日号および8日号から22,327語、RZと同時期の大衆紙の例として。
- ・オンライン版『ビルト（*Bild*）』（= BZ）：2022年6月17日掲載記事から23,040語、現代の（オンライン版の）新聞の例として。

新聞のサンプルに関して、日付や見出しなど

は、記事本文ではないため調査対象から外している。また、直接引用文のみからなる文も、新聞記者のことばではないため対象外とした。

### 2. 「話しことば性」の分析

#### 2. 1. 文の長さ

Eggers（1973）にならい、1文中に含まれる語の数を算出した。表1は、各サンプルにおける平均値を示している。RZにおける平均的な長さの文が、例10である。

- 10) Sie [Nationalversammlung] hat heute einen servilen Präsidenten, Milde aus Breslau gewählt, der bis zur definitiven Festsetzung der Geschäftsordnung den Vorsitz führen wird. (RZ, 21語 それ[国民議会]は本日、追従的な議長、すなわちプレスラウのミルデを選出し、議員規則の最終的な制定まで彼が議長を務める)

RZの数値は、比較対象であるすべてのサンプルの中ではMKにきわめて近く、現代の新聞の言語と比較すれば2倍近く長い、同時代の新聞と比べた場合、もっとも短いDRよりも約20%も短い。

表1：平均的文の長さ

	語	文	1文中の平均語数
MK	6,317	313	20.2
<u>RZ</u>	5,076	241	<u>21.1</u>
DR	17,241	662	26.0
ML	21,214	775	27.4
IZ	21,179	720	29.4
BZ	18,571	1,601	11.6

RZにおける文が同時代の新聞のものよりも短い理由としては、例11のような読者への呼びかけがみられることがあげられる。このような、あたかも目の前の読者と会話をしているか



のような言葉づかいは、万国のプロレタリアに向けた呼びかけである MK にも、しばしばみられる (例 12)。

- 11) Seht Belgien! (RZ, 2 語 ベルギーを見たまえ！)
- 12) [Schafft aber die Lohnarbeit, die Arbeit des Proletariers ihm Eigentum?] Keineswegs. (MK: 37, 1 語 [しかし、賃労働が、プロレタリアの労働が彼らに所有を生み出すだろうか?] ありえない)

次に, Eggers (1973) で使用頻度が最も高いとされていた「9 - 28 語」の前後で, 各サンプルの文を区分した (8 語以下の文を「短文」, 29 語以上の文を「長文」)。短文の例が例 13, 長文の例が例 14 である。また, それぞれのグループが全体に占める割合を, 表 2 に示している。

- 13) Heute werden an die Deputierten folgende Einladungen erteilt: (RZ, 8 語 本日, 代議士宛てに以下の招待状が配られる)
- 14) Herr Milner Gibson, Deputierter von Manchester und Hauptfreetrader, provocirt im offenen Einverständnis mit Hume eine unmotivirte Debatte mit Lord Bentinck, die sich bis ein Viertel nach 10 Uhr Abends fortspinnt. (RZ, 30 語 マンチェスターの代議士であり中心的な自由貿易主義者であるミルナー・ギブソン氏は, ヒュームによる公然たる了承のもと, ベンティンク卿との動機のない討論を誘発し, それは午後 10 時 15 分まで続いた)

表 2: 短文と長文の全体に占める割合

	文	短文 (%)	長文 (%)
MK	313	43 (13.7)	62 (19.8)
<u>RZ</u>	241	41 ( <u>17.0</u> )	54 ( <u>22.4</u> )
DR	662	45 ( 6.8)	229 (34.6)
ML	775	45 ( 5.8)	286 (36.9)
IZ	720	47 ( 6.5)	319 (44.3)
BZ	1,601	583 (36.4)	43 ( 2.6)

この観点からも, RZ と MK との類似性, さらには RZ における「話しことば性」の高さが指摘できる。RZ において短文が占める割合は, 同時代の新聞中最も高い DR より 10% も高く, 長文が占める割合は最も低い DR より 12% も低い。長文に関しては, 最も高い IZ と比べた場合, およそ半分しかない。割合が似ている MK と比較した場合, 長文の割合こそ RZ の方が MK よりも高いが, 短文に関しては報道文である RZ の方が MK よりも高い。これらの点から, RZ は全体的に「話しことば性」が高い傾向にあるが, とりわけ短文を好む傾向が指摘できる。

## 2. 2. 文の複雑さ

### 2. 2. 1. 文相当句

本論文では, 基礎文をまったく含まない文を文相当句として算出した。上述のとおり, この文タイプには, 「話しことば性」が低い見出しのようなもの (例 15) もあれば, 高い感嘆文もある (例 16)。いずれにせよ, この文タイプは RZ の同時代の新聞には, ほとんど見られない。各サンプルにおいて文相当句が全体に占める割合を示したのが, 表 3 である。

- 15) Kein naturwüchsig gliederndes Prinzip, Alles gemacht – bis auf den König Leopold. (RZ 自然に構成された信条なし, すべて終了——国王レオポルドに至るまで)
- 16) Welch rührendes Schauspiel! (RZ なんとまあ, 泣けるお芝居だろう！)

表3：文相当句の全体に占める割合

	文	文相当句 (%)
MK	313	21 ( 6.7)
<u>RZ</u>	241	12 ( <u>5.0</u> )
DR	662	11 ( 1.7)
ML	775	1 ( 0.1)
IZ	720	15 ( 2.1)
BZ	1,601	229 (14.3)

用例数が全体的に少ないため断定的なことは言えないが、同時代の新聞と比較した場合、RZには文相当句が多い。とりわけ、「話しことば性」が高いとみなせる文相当句(感嘆文)が多少なりともみられることは、当時の読者にとっては際立った特徴かもしれない(例17および例18)<sup>16)</sup>。

17) Wundersame belgische Konstitution!

(RZ おかしなベルギーの憲法!)

18) Herr Hume! (RZ ヒューム氏!)

### 2. 2. 2. 単一文

本論文では、自立的基礎文1つで構成された文を、単一文として算出した。すでに述べたように、これは最も単純な文タイプであり、サンプルにおいてこの文タイプの使用頻度が高いほど、そのサンプルの「話しことば性」は高いとみなせる。例19は単一文であり、28語を含む比較的長い文ではあるが、その構造はきわめて単純である。

19) Dann aber spiegelt die Sitzung des Hauses der Gemeinen vom 22. Mai das Verhältniß selbst der radikal und philanthropisch thuenenden englischen Bourgeoisie zur englischen Arbeiterklasse aufs treuste wieder [sic]. (RZ, 28語 しかし、その後、庶民院における5月22日の会議は、イギリスの急進的かつ博愛主義的にふるまうブルジョアジーの、労働者階級に対

する態度をきわめて忠実に反映している)

表4：単一文の全体に占める割合

	文	単一文 (%)
MK	313	114 (37.4)
<u>RZ</u>	241	84 ( <u>34.9</u> )
DR	662	196 (29.6)
ML	775	185 (23.9)
IZ	720	207 (28.8)
BZ	1,601	747 (46.7)

表4に、各サンプルにおける単一文の割合を示した。現代の新聞であるBZに比べると約12%も少ないが、RZにおける割合は、同時代の新聞としては最も高いDRよりもさらに約5%高く、読者に語りかける文体であるMKの割合に近い。この観点からもまた、RZの言語は当時の新聞としては、「話しことば性」が高い構造をしていたといえる。

### 2. 2. 3. 従属的基礎文の割合

文構造が並列的か従属的かに関しては、Ágel/Hennig (2006)にしたがい、文タイプごとの数ではなく自立的基礎文と従属的基礎文の数を算出し、両者の割合を比較した。表5は、各サンプルにおける従属的基礎文の割合を示している。この割合が高ければ高いほど文構造が複雑であり、「話しことば性」が低いことになる。

表5：従属的基礎文の全体に占める割合

	自立的基礎文	従属的基礎文	Σ	%
MK	377	246	623	39.5
<u>RZ</u>	256	278	534	<u>52.1</u>
DR	805	888	1,693	52.5
ML	1,110	1,037	2,147	48.3
IZ	957	950	1,907	49.8
BZ	1,514	620	2,134	29.1

興味深いことに、従属的基礎文をまったく含

まない単一文が多かったにも関わらず、RZにおける従属的基礎文の割合はかなり高く、最も高いDRとほぼ同一である。また、これまでRZとMKとはよく似た傾向を示していたにも関わらず、この観点では10%以上もの大きな開きがある。RZにおいては、複雑な構造をもつ文自体の数は少ないが、それらがとくに複雑な構造をしているのである。

その理由としては、報道文特有の問題が指摘できるだろう。一般的に、報道文においては、先行するテキスト（情報源となる政治家の発言や官報など）が直接的あるいは間接的に引用される傾向にあるので、MKのように自らの意見を主張するだけで良い文においてよりも従属的基礎文の割合が高くなる。さらに、従属的基礎文の使用頻度が高いRZとDRは、ともに特定の政治的立場をとる新聞である。こうした新聞においては、とりわけ自らとは違う立場からの発言が、接続法などを用いて、他者のことばの引用であり書き手の意見や主張ではないことが明確にされている必要がある。そのため、一般紙よりもさらに頻繁に従属的基礎文が用いられるのではないだろうか。例えば、例20においては、ある大臣の発言した内容が従属的基礎文8つで表されている。

20) Er [Minister Trélat] erklärt, viele Leute seien eingeschrieben worden, die sonst noch eigene Ressourcen hätten; andere seien mehrmals eingeschrieben und erhielten mehrfaches Salair, und die Folge davon sei, daß die Regierung sich jetzt gezwungen sehe, die Listen neu anfertigen zu lassen und nur wirklich brodlose hülfsbedürftige Arbeiter aufzunehmen. (RZ 多くの人々がまだ財源があるにも関わらず登録しており、その他にも何度も登録した者や何度もサラリーを受け取っている者がおり、その結果として、目下、この名簿を

新たに作成させ、実際に失業中で援助が必要な労働者のみを登録する必要があると政府は考えている、と彼[トレラ大臣]は説明した)

今回の調査においては、従属的基礎文の頻繁な使用は、RZにみられた唯一の、同時代の新聞よりも「話しことば性」が低いとみなせる特徴であった。しかし、その理由が筆者の考えるように引用であることを明示するためのものであれば、それは政治的な新聞一般の傾向であり、機関紙であるRZには避けることのできない傾向だといえる。

2. 2. 4. 文構造の線条性

Ägel/Hennig (2006) にしたがって文構造の線条性の値を算出し、各サンプルにおける数値を表6に示した。この観点においては、現代の新聞であるBZの数値が抜きんでおり（RZの約4倍）、19世紀の新聞に関しては大差がないように思われる。しかし、RZの線条性は同時代のどの新聞よりも高く、わずかながらMKよりも高い、という点は指摘しておくべきだろう。この観点においてもまた、RZにおける「話しことば性」は、19世紀の新聞の言語としては比較的高いのである。

表6：文構造の線条性

	基礎文の 中断	基礎文	文構造の 線条性
MK	42	623	14.8
<u>RZ</u>	35	534	<u>15.3</u>
DR	150	1,693	11.3
ML	163	2,147	13.2
IZ	188	1,907	10.1
BZ	34	2,134	62.8

RZにおいては、1文中に基礎文の中断が複数回あるケースは2例のみで、いずれも例外的に長い文であった（77語および139語を含む文）。例21は、そのうち77語を含む文であるが、ナボ

りに関する議院解散に関する複数の情報が1文に詰めこまれているため、とくに複雑な統語構造になっている。

- 21) In Betracht daß diejenigen,  
welche zu Mitgliedern der  
Deputirtenkammer erwählt waren,  
am 15. Mai, wie aus authentischen  
Actenstücken hervorgeht, sich  
vereinten um den Charakter einer  
Assemblea unica rappresentante  
della Nazione anzunehmen, daß  
sie ein Sicherheitscomité schufen,  
unter dessen unbedingtem Befehl  
die Nationalgarde stehen sollte, in  
Betracht daß das illegal war, da  
von jenen Mitgliedern noch nicht  
der von den Gesetzen erforderte  
Schwur geleistet war u. s. w. hat  
der König von Neapel (am 17) die  
Deputirtenkammer aufgelöst. (RZ 代  
議士に選出された人々が5月15日に、  
信用における文書が伝えるところで  
は、Assemblea unica rappresentante  
della Nazioneの立場をとるために団結  
したこと、国民軍がその命令に無条件  
で従うべきとされる国防委員会を結成  
したことを考慮し、また、その議員た  
ちが法的に求められている宣誓を行っ  
ていないため、そうした行為が違法で  
あることなどを考慮し、ナポリ王は(17  
日に)この代議院を解散させた)

この観点においては、MKの方がRZよりも「話しことば性」がわずかながら低いことも指摘できる。MKにおける従属的基礎文の使用頻度がRZよりもかなり低いことと併せて考えると、この傾向は奇妙に思われる。もちろん、教養市民層に属しており古典文学を愛読していたマルクスが、複雑に入り組んだ文構造を自然と好むようになったのかもしれない。しかし、線

条性が低い理由と考えられそうなのが、例22のような言い換えである。

- 22) In demselben Maße, worin sich  
die Bourgeoisie, d. h. das Kapital,  
entwickelt, in demselben Maße  
entwickelt sich das Proletariat, die  
Klasse der modernen Arbeiter, die  
nur so lange leben, als sie Arbeit  
finden, und die nur so lange Arbeit  
finden, als ihre Arbeit das Kapital  
vermehrt. (MK: 29 プルジョアジー  
が、それはつまり資本であり、発展す  
るのと同程度に、近代的労働者の階級  
であるプロレタリアートは発展する  
が、彼らは労働している間だけ生きる  
ことができ、かつ、彼らの労働が資本  
を増やしている間だけ労働することが  
できる)

ここでは、“die Bourgeoisie”を“das Kapital”と言い換えているため、基礎文の中断がおきている。しかも、中断はおきてはいないが、その直後にさらに“das Proletariat”を“die Klasse der modernen Arbeiter”と言い換えているのである(中断が生じない言い換えは例6や例8にもみられる)。このことは、前述のリープクネヒトの指摘、つまり、マルクスが最小の空間に可能なかぎり多くの内容を詰め込もうとしたことを思い起こさせる<sup>17)</sup>。マルクスは、1文中により多くの情報を詰めこもうとした結果、本来なら不要であったかもしれない基礎文の中断を生んでしまったのではないだろうか。

## V まとめ

RZの言語は、従属的基礎文の多用を例外として、ほぼすべての観点において同時代の新聞よりも「話しことば性」が高かったことが確かめられた。この傾向は、編集長であるマルクスの言語意識——新聞の言語は感情的なものでも



あると考え、入り組んでおり読みにくい文構造に批判的な目を向ける——と合致している<sup>18)</sup>。また、従属的基礎文の多用に関しては、上述のとおり、特定の政治的な立場から報じるという機関紙の性質上、避けられない傾向であると考えられる。そして、その「話しことば性」が高いRZであっても、現代のBZと比較した場合には、どの観点においてもBZよりも「話しことば性」が低いのである。このことは、書きことばの「話しことば化」の一端を示しているように思われる。ただし、BZが現代の新聞のなかでも例外的に「話しことば性」が高い可能性もあるため、「話しことば化」を指摘するためには、今後、現代の他の（オンライン版の）新聞の言語も同様に調査する必要がある。その際には、調査方法は異なるが現代の新聞の言語を扱っているFischer (2007) や Uhrich (2015) などが参考になるだろう。

このような調査が他の研究対象（時代やテキスト種）に対しても行われることで、書きことばの「話しことば化」というドイツ語の変遷を、より多角的に考察することができる。本論文が契機となり、歴史的なテキストの「話しことば性」を扱う研究が増えることを願う。

## 注

- 1) 例えば、同じ新聞における報道文であっても、客観的なニュース記事と筆者自身の体験を元に報じるルポルタージュとでは、使用される語彙が大きくことなる。ルポルタージュでは、「話しことば性」が高い語彙である直示表現が多用される。
- 2) Vgl. Hosokawa 2014: 20.
- 3) Vgl. Eggers 1973: 12f.
- 4) Vgl. Eggers 1973: 36f.
- 5) Vgl. Auer 2002: 131.
- 6) Vgl. Ágel/Hennig 2006: 64. ただし、本論文では見出し類は調査対象から外した。
- 7) ただし、Auer (2002) は、dass文やwenn文など特定の副文は口頭発話でもしばしばみられることを指摘している。Vgl. Auer 2002: 131, 137.
- 8) Vgl. Auer 2002: 135f.; Hosokawa 2014: 186.
- 9) 具体的には„Die bürgerlichen Produktions- und Verkehrsverhältnisse, die bürgerlichen Eigentumsverhältnisse, die moderne bürgerliche

Gesellschaft gleicht dem Hexenmeister“ という主文が„die so gewaltige Produktions- und Verkehrsmittel hervorgezaubert hat“ という副文に、„der vermag“という副文が„die unterirdischen Gewalten nicht mehr zu beherrschen“という不定詞句によって中断されている。

- 10) 『新ライン新聞』のサンプルには、従属的基礎文6つ以上を含む文が5つあり、そのうち4つが49語以上を含み、同様にそのうち4つに基礎文の中断があった。
- 11) Vgl. Stöber 2000: 202, 207; Hosfeld 2018: 66.
- 12) Vgl. 望月1982: 25f.; Stöber 2000: 161, 172; Hosokawa 2014: 60; Hosfeld 2018: 27-31.
- 13) 『ライン新聞』への出資者だった人物のなかには、穏健派の自由主義者で、三月革命期にプロイセンの首相を務めたルドルフ・カンパハウゼン(Ludolf Camphausen, 1803-90)のように、政府側についた者もいた。Vgl. Hosfeld 2018: 65.
- 14) Vgl. Hosfeld 2018: 65f., 73.
- 15) Vgl. Hosfeld 2018: 65f.
- 16) BZにおける文相当句の使用頻度がきわめて高いが、これは現代における新聞の言語一般の特徴ではなく、1960年代からのBZ固有の特徴である。Vgl. Mittelberg 1967: 184f.; Hosokawa 2014: 161f.
- 17) Vgl. Marx/Engels 1974: 25f.
- 18) Vgl. Marx/Engels 1974: 375, 379, 381f.

## 一次資料

- Deutsche Reform*. Berlin. 1. bis 3.1.1850. [= DR]  
*Illustrierte Zeitung*. Leipzig. 4. und 11.1.1851. [= IZ]  
 Marx, Karl/Engels, Friedrich (2019 [1848]):  
*Manifest der kommunistischen Partei*. Berlin.  
 [= MK]  
*Morgenblatt für gebildete Leser*. Stuttgart/Tübingen.  
 1. bis 29.1.1851. [= ML]  
*Bild.de*: <https://www.bild.de/> (Stand: 17.6.2022).  
 [= BZ]  
*Neue Rheinische Zeitung. Organ der Demokratie*. 1.6.1848 und 19.5.1849. In:  
 CLARIN-Servicezentrum: <https://www.deutschestextarchiv.de/nrhz/> (Stand: 10.5.2024).  
 [= RZ]

## 参考文献

- Admoni, Wladimir (1987): *Die Entwicklung des Satzbaus der deutschen Literatursprache im 19. und 20. Jahrhundert*. Berlin.  
 Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (2006): Praxis des Nähe- und Distanzsprechens. In: Dies. (Hg.): *Grammatik aus Nähe und Distanz. Theorie und*

- Praxis am Beispiel von Nähetexten 1650-2000.* Tübingen. S. 33-74.
- Auer, Peter (2002): Schreiben in der Hypotaxe – Sprechen in der Parataxe? Kritische Bemerkungen zu einem Gemeinplatz. In: *Zeitschrift „Deutsch als Fremdsprache“* 39 (3). S. 131-138.
- Burger, Harald (2005): *Mediensprache*. 3. Aufl. Berlin/New York.
- Eggers, Hans (1961): Wandlungen im deutschen Satzbau. In: *Der Deutschunterricht* 13. S. 47-61.
- Eggers, Hans (1973): *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. München.
- Fischer, Annika (2007): *Online-Journalismus. Wie Printartikel sich von Online-Artikeln unterscheiden. Eine quantitative und qualitative Untersuchung anhand überregionaler Zeitungen in Deutschland*. Norderstedt.
- Hosfeld, Rolf (2018): *Karl Marx*. 2. Aufl. Reinbek bei Hamburg.
- Hosokawa, Hirofumi (2008): Das „Zeitungsdeutsch“ aus der Sicht Arthur Schopenhauers. Eine soziolinguistische Betrachtung seines Sprachbewusstseins. In: *Neue Beiträge zur Germanistik* (Japanische Gesellschaft für Germanistik) 136. S. 100-112.
- Hosokawa, Hirofumi (2014): *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen zur Sprache in Zeitungen um 1850*. Frankfurt a. M. u. a.
- Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (1985): Sprache der Nähe – Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch* 36. S. 15-43.
- Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (2007): Schriftlichkeit und kommunikative Distanz. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik* 35. S. 346-375.
- Krüger, Christiane (1995): *Journalistische Berichterstattung im Trend der Zeit: Stilstrategie und Textdesign des Nachrichtenmagazins FOCUS*. Münster.
- Marx, Karl/Engels, Friedrich (1974): *Über Sprache, Stil und Übersetzung*. Ausgewählt und herausgegeben v. Heinz Ruschinski/Bruno Retzlaff-Kresse. Berlin.
- Mittelberg, Ekkehart (1967): *Wortschatz und Syntax der Bild-Zeitung*. Marburg.
- Pfeil, Monika (1977): *Zur sprachlichen Struktur des politischen Leitartikels in deutschen Tageszeitungen. Eine quantitative Untersuchung*. Göppingen.
- Polenz, Peter von (1999): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd. 3: 19. und 20. Jahrhundert. Berlin/New York.
- Polenz, Peter von (2000): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd. 1: Einführung, Grundbegriffe, 14. bis 16. Jahrhundert. 2. Aufl. Berlin/New York.
- Schwitalla, Johannes (2006): *Gesprochenes Deutsch*. 3. Aufl. Berlin.
- Stöber, Rudolf (2000): *Deutsche Pressegeschichte*. Konstanz.
- Uhrich, Daniela B. (2015): *Die Auswirkungen der medialen Internetnutzung auf die Print-Zeitung. Eine medienlinguistische Analyse*. Dissertation. Julius-Maximilians-Universität. Würzburg.
- 細川裕史 (2009)「社会語用論的語史研究とはなにか? —社会コミュニケーションとしての語史に関する一考察」学習院大学ドイツ文学会『研究論集』13号, 67-94ページ。
- 細川裕史 (2014)「文章語に取り込まれた『近いことば』の統語レベルにおける特徴—書簡体小説『若きウェルテルの悩み』を一例として」阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』55号, 51-68ページ。
- 望月清司 (1982)「『経済学・哲学草稿』と『ドイツ・イデオロギー』」望月清司・内田弘・山田鋭夫・森田桐郎・花崎皋平『マルクス 著作と思想』, 有斐閣, 23-75ページ。

(2024年11月15日掲載決定)